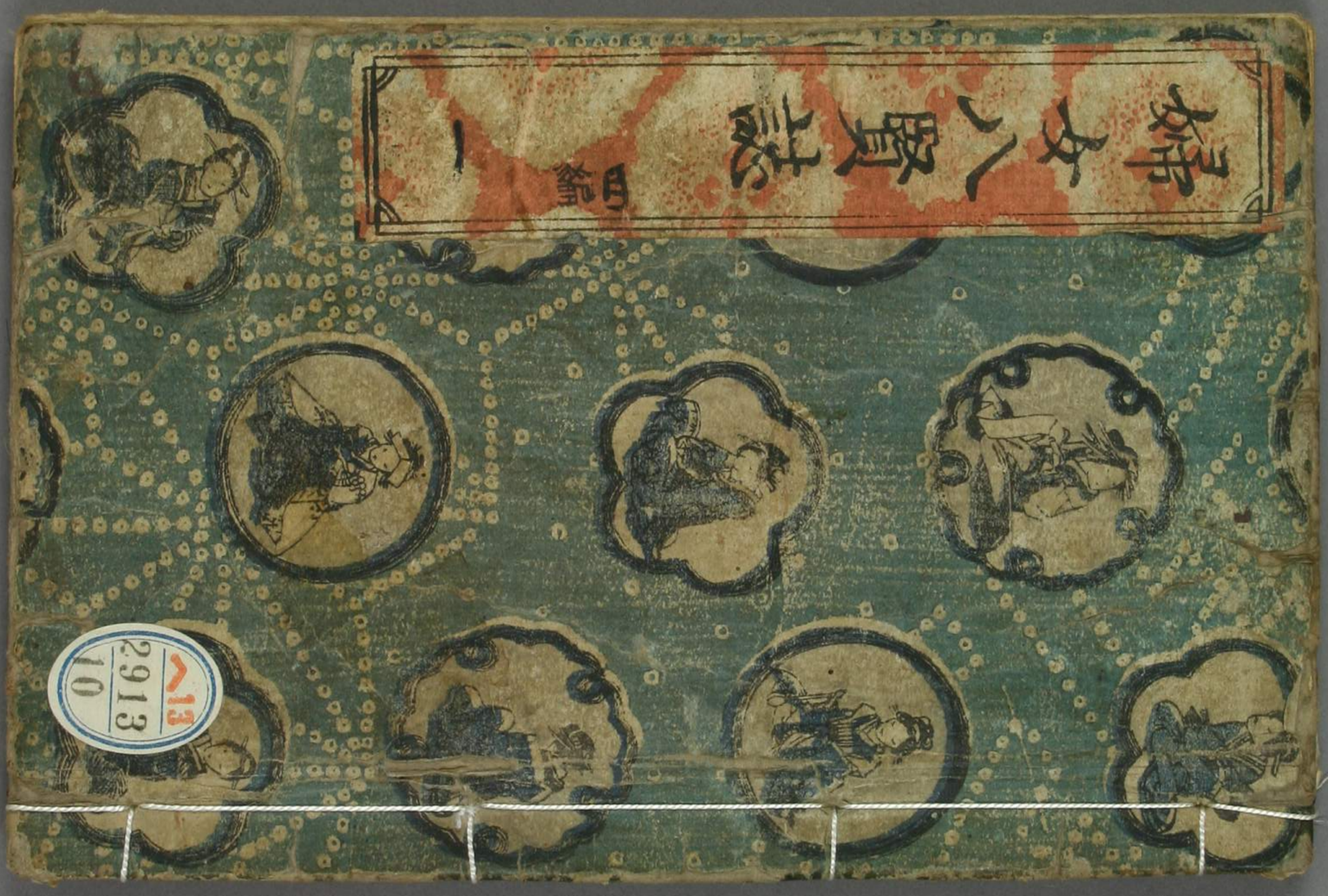


>13
2913
10

村田

稗史小説の児童ハ益なる唯可成
欣喜〳〵ム心を遊玩〳〵せるの謂ひなり
或ハ勸懲の一助〳〵或ハ入学の一捷
徑〳〵介〳〵手ぶ如き无力の走筆并を
よく〳〵分解せべくもあ〳〵ねど尚僥倖ゐ捨
らまゝバ嚮ふ婦女八賢誌九巻を繼ぎ

2913
10
昭和九年七月六日

孝貞義節を專ふ〻ふさう玄淫を
禁戒と称するものゝ毛頴の行所志の
如くなるゝで拭ふ俗ゝ捨て早ふ止ゝつ
有右面ひる夏五稔あり六稔と言ふ
這回ふゝり猶其次篇を輯録てよゝ
書肆が望ゝの屢ゝなれバ辞爲ず言

序ノ

語も孝ゝ子今將五冬を編次つ篇四
輯ゝ考ふゝものゝ唯飽食の幼稚ゝ
爲ゝ解ゝ易ゝ式も要ゝ其れで世間
愛識の風君子が笑ゝ叱言爲ゝ
ゝゝ

押北の鈎夫爲永春水記

稻束
飯櫃
金賊
生命
酒泉
蠻蠻
牛馬
車
從者
愛敬
官帶

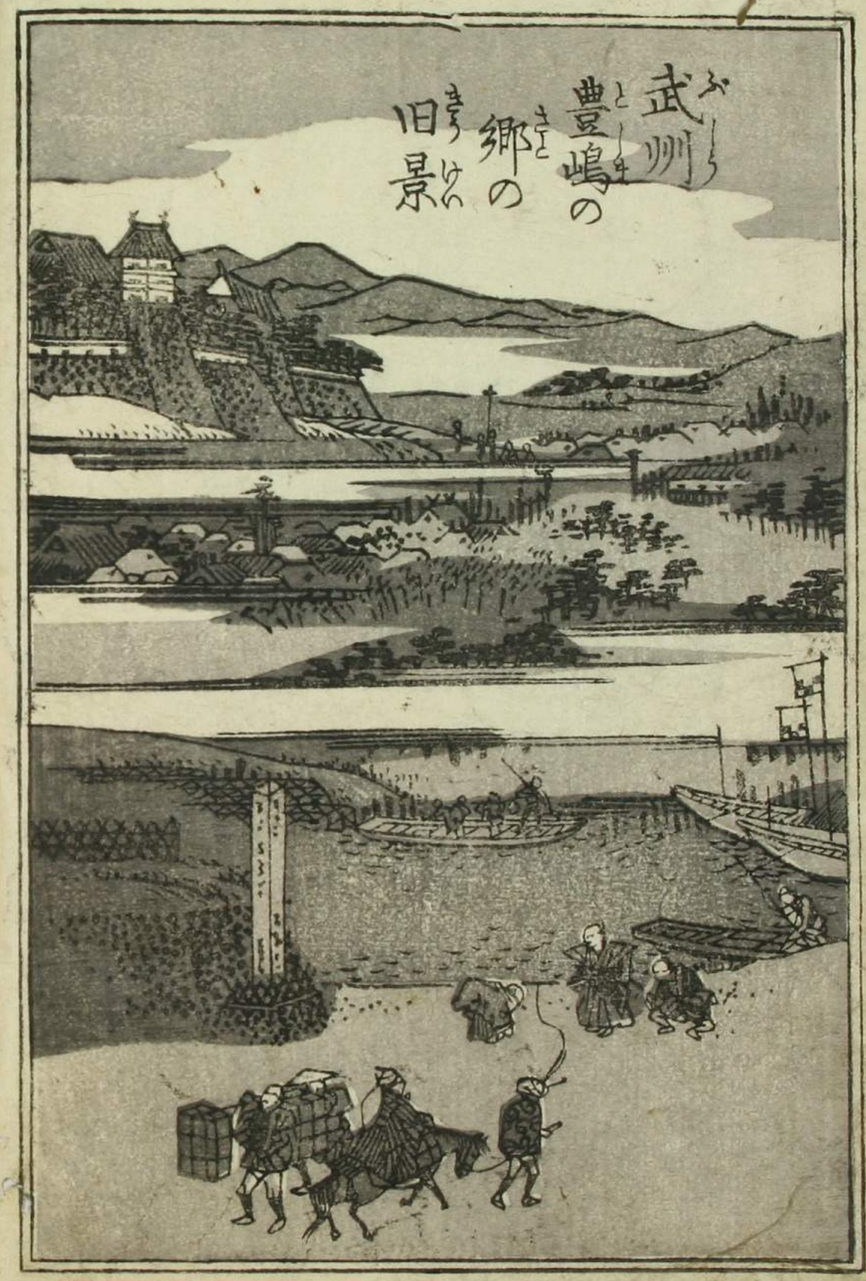
計升
衣裳
筆硯
印鑑
腰越の阿安

勇婦於道

奇婦阿多毛

泡木枯く煙りの末や雲のこゝ

絶ぐーき村の梅や紅の冬



貞操婦女八賢誌四編巻壹

東都　狂訓亭主人編次

第十九回

船樓ふ二賢雌雄を爭ふ
腰越ふ乙女乙女を救ふ

再説梅太郎八日外夜塚ゆでもたるおとこ勇婦青柳の物語
ひて勝て図し養父の横死孩くうちゆも遺言の錦の
絃を尋ね出し再度家名を興さんと思ふものうち又更ふ
色ぞとのふる掛てもなく空しく月日送る程ふ今見うん柳の
絃を巾戸張ふして船樓の傳しゆり貴賤を撰まず洋ひ来たる

港の風流ゆゑ、ちらすまじき得ひとゝ強くも思ひ一個三
重の樓の勝れたる錦の山雑を奪ひ取りさゝゆる仕女を撰て個ら
武ひ八敵を忍び仆し又取つくを蹴うゝして圍を脱さんと働け
どもかのせん階みの下央數多の下仕の女中達ふるふ得物を
引提て討て取らんとひしめくゆゑ脱さるべき道のなけれバ甚ふか
必死をきはめる程もめしもせず八代と名乗て樓へ登り来る捕
ての處女ハ折容なる名乗る那三重の二重目すでにきつゝ上
走登り樓をきつと見ひげつく支なる女中ふ物言ん當時漂金ふ
並びなき管領さるの山内君苑の方の催しある此秘樓ふ隠りなく
聞うて發ぐものゝ多くゆゑ錦の山雑を奪ハんと身の程知らぬ
者豊鳥の残黨と関ゝハ猶ゆるさるゝ覚朝七吐八代が捕ふ
受ると雲ゝ第三重目の樓へ飛鳥のごとく近登るを御ハ見ゝ
些とも発ぐ身緒ひしを行合矣忠孝ふゝを身ひとつふ思ひ込ゝ
代極ゝ徒令数百の軍勢ゆゑ十重北重ふ夜巻とも物の数とも思ハぬ
ゆゝる女子の脱立せずと怪我なゆ先ふ降伏りやと言ハ是て八代冷笑ひ
兎蓋の問答せんよりハ縛ゝけよと言ゝも准後の十ゝを振ゆげてやゝ変
行ゝるゝ御ハ寄せ身ひきゝ透ゝゝ欲つゝる衆を撥ゝ八
代が組んとまゝを組せずとゝるひふ乗ふ虚く実く遠方ハ十ゝ那方ハ

短刀一上一下と抜ひきぶ双方劣らぬ働きハ眼目さるゝしくぞ見へふ
ける結てめるゝ半鋼だくり命ども勝負ハ見へざりしぶのゝふや
ゝ暫けん有命ふぐまふお梅が持るる短刀の得元よりして折ぞ
八代潔くうと打込む十文字とぐしと引組むお梅が卑怯心得
たりと八代も十文字投捨組合て上ふ下まさ下ふ成る眼も
覚ふき折こそひき俄ふ暴風吹起り荒波さげしく怒狂ふ
きも大きふ造り立一三重の楼船も何くんぞ堪て
べき瞬間ふくぐり大浪の中へ打込ぞ船折ともなく流
豆ける其中ふお梅八代の両男婦人組合ふ乗ものふ
くぐる船と諸侶ふ高楼より転び落ら千尋の底ふ沈ぶこ
ゝと思ふの外嶋ふお梅ぶ素早しく小船の中へ倖ひふも
二個一折ふ落しぶも新まで荒き波風ふまぶ須臾
其折ふ猶ぶ且ふき楼より転び落し変ふまぶ
両個ひとしく島絶して艫舳をあやつるふあらざれば沼の
まふく吹流さる行末覚ぶとのりふけり前活体題変ふ
發端藻倉の西ふひろうて腰越とのる一村あり藻倉より人
道も僅ふ満ふりけまぶ常ふ往ふむ人も稀ふして世ふ捨ひ
ふき庵影ふり這ふ一篇の賢女ひりて名ぶお安と号ま

けるゞ双親ハ世を早く去りて孤となりしを里人の養に育られ成長あるさゞひて容顔の美麗なる市氏ゞ玉をもひざひくべく姿形の美しきこと春ふ柳のごし今年僅か十七なりとども其才ハ老女も及ばぬ且力ハ強く武芸の道ゆも賢けれども常ゆハ猟を業和ふ七仮ゆも仁と辛ねバ村中ハ言ふもさらなり近ゆまでも関係人て養ざる者もなりしゝば或ひハ嫁ふ貰ひたゝ賛ふなりて言ひ入るゝあまバ又ハ好色の若郎なるハ色ふ為ふ胸を焦ゝ言ひ寄る者も多うゝ如なるゆゆ世お安ハ兵能程ふ断りて聟を求めど他ゆも嫁ぜぬ況海ゝる夏なゞハ御見えるるもおく其身ハ竹瀬川へ網を入て漁まるを行業とゝて細き網りを立てくも世を最易く送りけるゞ這日ハ殊ふ空晴て波風ともふ穏なるふ公ふおのハよりもひまバ早朝より船を乗出し竹瀬川を上流下流へ網を入まくあきりまハまど小魚まとゝを得るのみなて余なる者の讃もひふねどさまバとて又他を求めど一個ふ獲ふ在て身の行末を思ひやるゝ黙然とゝて居る折しも風ふ沖の方ふ常りて暴風なげゝ吹起り最凄まゝく見ゆ

長瀬川は
たからぶね
三賢を
乗せ

ゆぞお安へ船を芦間の漕入る須臾風間を待けるも変
打ぐあて居りける新る折しも川下より忽然として一ツの
小船浪を引まとゞよひ来るあるで芦間へ流れ入るゆぞ於
安へ見つく怪しゝ者ぶり近寄るまゝふようく見れば年の頃
十七八の美女ぶ世戈ふいとぶざる容貌美さしき二個の處女ぶ
きも身怪き衣裝なるが組合る俵船底へ仆きて身ハ
絡てひりお安へいよ〳〵接きつも思ひ合る変ぶ舳を
逆まふ取り直し那船家へ打ふけて遠方の船ふ引放つ
驚〳〵詳ふ聞き止ぬ扨那船ふ乗り移りて二個の體を見るに
見るふ耐呼吸の通ひなるゆぞ准備の薬を呑ふ先其
一個抱ひ生る変十変だるふ及びしきアント言ひつく
息吹く人一四辺を爲瞬〳〵見まハして忙然たるゆ半晌
だり須臾言語もひぶざりしをお安へ見つく打含笑如ぶお心
附きしるお怪我へなきと介抱バ件の處女へ審ふ如
處のお方ゝ知らねどもつへゝ見別ぬ吾女ぶ情ハ嬉しきぞう
なまど若やお孫も敵方のと疑ふ言語をおしぶ吾侍ハ
実より程遠ぶ腰越村ふ成長須引の業ゝ世ぶ渡る安と姫
ゝ賊しの者最前俄の大暴ふ波を凌ぎふ芦間へ船を寄ること

程もなく風随来りて一ひらの小船中央にお帯と見るお女中
組合ひ立ぶら氣絶の様子審なれども捨おく是ねばお勝を
先へ呼びせて様子を聞さ其うち家内にお女中をも介抱
及ぶとなぶらお二個のお公の和らぐ中乃やうと思へて此仕
合せ別あみ細へどぎんせねば吾倩あおお公を乗へ源まうくね
変なるべ異ふ様子を語りて之と赤公面ふ頭へ是一お安ぐ
言語をつくづく聞て處女へ公安堵一度ども猶疑ひへ晴是
ぐらく言んとるく猶縁をお安へ推して打点ぢお帯の疑念
然るのなぐい巻をとるまー此船を是ば他ふ洩聞者もう一度

よりて遠方ふもお話りを子細もひの是ば眠合なるるあ
ども在て打明け語りてよりを再度聞へ是て那處女へ須臾
思按の幹なりしぶ四辺を見まへー言語を密めお公ひりげな
お前の言語斯合頃ふ聞ひのふを言へどへ是ぢを奇へね。
抗し女子と思へまん世ふ隙まを変なるぐら吾倩へ豊後の
家ぢ的某ぶ處女なるども實父の上へ先を産ふ為て
恩深き養父とのへ武義なる妻塚とのふ里の長を藤と
称者なりしぶ頃主平塚家の内命ひて越の長尾へ密使の
大役背尾ようなりて帰る路松井田宿の野中ふて扇ぶ谷の

捕まへ出会へ道まこと行と戦ひしこうども那方へ美物遠き
方へ小物弾み老木の座敷の傍で金を落し
文のそうで大切なる錦の巾籠その上へ沙金巨多を
入れ豊浦の家を再興の便宜を主所へ失ひて又
塗術もうきものの心余こそ行時も捨置まねば義婦者
御と如を金せ吾倍へ遠く未栄苅る妙薬倉へ忍び居て
巾籠の在所を尋ねしへ今日船楼の傍へ船楼へ走登り
傳ひと思へばいとど嬉しくて心太くも呉一個那船楼へ走登り
首尾よく巾籠へ入りこうども数多の女中へ捕囲まれ弾へ
見る八代ろ名乗こう処女の武勇力量絶へ双を打ち切る
互へ組合へ折とそひ見俄の風へ船くるぐり那三重の楼より飛び
落ると思ひしのそ夫ろ先へ何程ありしろ知らで遠所まで流
さ見ぬ者の時へ藻生しに忍へ雲へん方もなく身を彩へもる
ども此君を報へあやうね義理ゆえ脱へ巾籠の身へ入上へ
行時もとわく豊浦家へ携へ行て亡父の先の仇辱復讐がねば
遺言うけ〜此梅が草案の蔭へ言訳なし吾倍が功ゆえ
身女犬馬の労へ〜ともゆうぞ巾籠を報じまた形うのふうち
心急く捕へ女中の藻生ね先へ遠く妙場をと言へ

お梅が立あがるをマア〳〵待てお梅さん吾侍が一言いふまいり
と言ひて遠方へ仆れる那八代が起ひるをみるより旅
梅もまたお安も驚き強くを八代がおー漢なく形容をあらため
あつぬ夏ことお梅さん郷蔵ハ悪ひるを
ぶりまゝと関てお梅ハ不審顔吾侍が恋を受ことなる
左様してお茶の身のうへとなり関ひ久さて八代い涙ながら
目の縁を袖にて幸度お霞ひ言ふも聞るき夏ことり吾侍が
実の爺さんも多塚村の百姓にて名を粮七と呼ばれ
ある者なりしが三年塚の大酒に家財も田畑も賣
盡し漸てもなほ年貢の未進歎いて見ても聞ばを
ともに那強慾な大六殿仲に死義ぶ爺さんを牢の中に
つるゞ日毎に不納を責ゆる見ば出さん病苦のそば
うに呵責て命に須臾もまもるまじ僅半月ばかり
間に牢の中に死去り哀れ余ども氷道の大六殿情地なし
ぞや吾侍ぞまで牢に入れんと言ハまつをお茶の親四郎兵衛
さんのさゝめぐに抱成の哀れ苛き命を助りても在所に住居も
ならざるべ吾侍の丁度七才のとき嫁さんと共二個の朋
なる多塚を涙ながらに立出てさて行べき方もなけれど汗深

舎ふ御の中家のひりしを知るに尋ねて関ばを人をいつの
程ゆる世を去りて頼まん方もひら筏の由井が浜辺ふまよひ
寄る波方なきふ親と子が其御ふ覚悟を極めつく身を沉んと
寄る御を扇が谷家の奥女中繁咲さんとの人お方が代家の
お暇うげ夫と見るより四方の中ら吾倍を親子を
呼び止め子細を委しく聞きて情深くも嘆さんと
吾倍を館へ伴ひ行きお初原の中ふ暮ハ是二月三月送る
うち倍ふきう家ふ倍ふ又嘆きんふ死別を夫ら後ハ
繁咲さんの四世話ら吾倍が十四ふ成ら仕
一女中ふ加えら是武家ふ奉公まるらハ物書道ハ言ふ及
ば鈴御業御の一ふ二ふハ知らねばならねと流ひる毎に
繁咲さんより教へら是四月日をるうち四朋輩の妬を
ふて繁咲さんふ奥様より四不興を蒙りふひ夫が病の
お看とりて今より三絵先の秋終ふ空しくなりの人千楽
さと曙さふ神八涙の乾く間も泣明ー又泣暮ー月数い経れど
去らぬ歎きの中ふ今度の僅ー錦の羅を四戸張ふ他の
涙ふも私ふー実ぞ四恋の報じ祈と繁咲さんふ私組巷の
噂ふ変寄せて及ばぬふ奥さんを恋ふ世ー甲斐文も

なく及て此身に罪を得て四海の中に押込られしを又そうぞうしくも梅さんの捕られの仇をゆるさずとて思ひるお方の腹にてもあらじ勝負を早ひしに負でごぎんしゝと身の越方を物語まべお梅はさてもうるおやさん感慨しそぞ已ざりける

第廿四

芦間の忍術暗ま錦籏を奪ふ

漁村の扁舟暁ふ三女を送る

當下お安は嚮ようの二個が言話をつくづく聞て思はぬ小勝を破とおもち天晴是迄お両女のお物語を聞よ分け稟もも嗚呼

ある夏ぐり吾倅が實の父弟うえは基漁倉の商人なれとも利欲に深心を生せど武術を好むのゆゑを力絶まで強けまべ間と相横の物を得て強きを蹇き弱きを助くる侠客あて在しべ人も敬ひ来しまふ其身の運や拙うけん四十もいまゞ越ざるに一穏疫病を煩よてきめぐ医療を尽せ

ども終に某の恵ふ一家の極の枕辺に吾倅を近く呼び寄せて我は素より商人なれども利慾のみに心を寄せ生涯をさもさんの業に精く思ふ故より武士の小官ともなり給へ一筋の主ゆもうしんと思ひしるも乃深きを今を最期とうりしとも死会といふも除りなり其方へいまゞ初めて縁ある女子の身

うまれども我存命を受継で成長の後武勇をひらかんと身
をも家をも忘べし遺言する人是のごとくなれば必ず
急るゝと言へば是時は吾倘は五ツ幼かりし悪しくて如何を
べきと思へうち又嘆きうんも世を去りて親族とてもかゝれば
此腰越の辺り里人達の情ゆえ成長ゆゑ捨てびて彼の
遺言を須臾も忘まじ家武名を顯はさんと思へど未熟の
吾倘ゆえ身ひとつゆゑしてけひ〻〻神の冥助を蒙らんと
此行より程も遠からぬ江の嶋の弁才天ゆ夜毎ゆ歩みを運び
ゆく祈念し他変はなりしゆ頻満日ゆ及び〻参社擅ゆ思ひを

眠りゆ夢楽の妻と倘ゆ神女の出現なるを
思ひ明らかなる由変ゆえ汝を世ゆ拳んとまろとの宿
願ハ空しからねとのまぶ時運の至ふねば今よりあらゆる
厭まして汝が遇世の因縁ある七ツの星ゆ思り達び汝と倘ゆ
八ツの星金く集る変を得べ厚く四海ゆ名をひげらく後の
世までも賢女と称まん汝其星成得んと思へば日毎ゆ
行瀬川ゆいとり見ようるふぎ一ツの星ゆ達んと宣へよと
思ひしゆ忽ち義ハ覚しへば是遥義うんと精く
神前ゆ祈念して変より神のおし人ゆ住せ日毎ゆ江川へ船を

浦べ待甲斐ありて今日と今日お二個さんの逢ひし夏
極ふ神の導ら吾倍がよろこびはうあるを打聞く
八代お梅是又京中の一丈寄らりと驚嘆しもぞ居くりける
其ときお梅八両婦ふ対ひ其お話を聞ふつけ思ひ合とる
夏ありとて那青柳が身のうるおの尾のおんのうお春の尾のおんの
また一伍一付を憚らと介して見まべ江三個ちまと青柳と
ふ處女も喝とて異見る毋ふ五ひ伝ゞる縁ありべ今ら
妃婦の義をひきび苦楽を倍ふまるるとべ嗔頼母しうど
ぜんあやうと責ハまて安も八代も倍ふよろこぶ不思ふの

顔をまろ〳〵見て。お程喜さん。お友さんら。そ〳〵一首尾
ハと聞ひ合ひ且此方の婦女ハ完全と打笑ふ其所ふ嫁
ふハどぜん せん縁て纔果しと通ら吾倍ハ彼方の芦間
ふ船終の船みを立聞ふお梅と共ふが飾の簪をうふ
所持せ〳〵拵ふ遊を窺ひ覗ひ寄ら習ひ覚へ〳〵恐の
術ふて嫁て准備の小色と内簪の色と摺智て則愛ゆと
言ふ〳〵嫁ら〳〵て件の簪を取り出しつ四辺を見まわし
首尾よく奪ひ取ら且ども お梅と共ふが心付き今ふ見て
来んも初且ぞ お前ハ四簪を推乃へて世とも速く此る個所

妃婦不思義ふ
錦の旗を
奪ふ

お道さんへ熏ひのげ山蘇をお飯しらへ紙おしの有
ハ必ず吾倫ハ爰ゆふ思ひ居て今一ぱい飯どぶんまと言つく
山蘇を[illegible]那方の婦女ハ受取てそんなら吾倫ハ明の
場所へ〻く合点でさんまと互ひに喧き頭をさつく道を遠て
芦原をゆく所ともなく走せ去りける

作者云ふ竜竜なる両個の女ハ善ら悪ら開も甚奏
後田ゆ解ゆ繞得て委しきを知る人
却て繞勇婦お安ハ両婦を我家へ伴ひつ囲炉裏の埋火
掘出し先行燈ゆ灯を照らし両婦を甚だ安堵せその
哥縁爰ゆ三女を命せしゆるも奏功天の冥助なる
量り知ぬ変りけり徒て三個の長潭ゆ永き日も
稍黄昏て塒へ急ぐ群鳥の羽音ゆお安ハ打おどろき
餘り話繞ゆ実が入て日の暮るを人ともせ
遠ハ人里遠く洩聞く人ハめくれどもお両婦さんの四
辺ハ顧ハね吾倫のゆ見苦しくとも今宵一夜ハ
吾倫の住居でゆるゝとゆるの話繞をいうませう倫の
此宵閑路次を忍ぶ〻仕つまもうしいざ潜伏ゆと言ひつく
竹方の芦間ゆ舫を走らる那図舫ゆ乗り移ばゆ二個も繞く

の
乗りうつる其時お安へ今まで乗り居し小船の舳先に
ほを掛て船の若もの伝ふ代ふらぐらせて神原へ
船の殘りハ多ひと言ひつく完帰と行矣し其力量を感歎
して両婦ハ同と同を見合せて最さのもしくぞ思ひける
有て先お安ハお梅なる両女を船より丘に登らせつ、その
身ハ船を芦間に繋ぎ投網を肩に打かけて両女に先立案
内成乃川く程遠くハなく我家の方へ里を遠めて急ぎ行時ハ
淋しき海辺に漁くする河原のわりさる最物凄き新を
見て右方左方の芦間より現出せる二個の婦女互に
身も倒さに固居して最様々の色彩でハお骨董のさらお服
きえ慢お空食どぶんおやうの色膳のお菜をと思くぞ伝
ひをもて初る卑賤世渡りの男のそばにて支さ人ぞ
おいの食ハ初りぐらも初見来を祝く居るし吁瀬川
みそる懐の雑炭毛なと焼てお夜食をと言ふを両女へ
おしぶる鮮ふを関ぞ五ひぐり圍炉裏に紫を行樹らく
ぶづく夜食を安桃して最食頃に初ひるぬぞ二個も
今ハ鮮ひうねて其赤ぶを照びつ、寅も主も諸伝ふ祈
久饌も果しくぶ又りや互ひの身のうぶを説つ説まつ

久え
間読み斯須時刻のうる程にお梅は嚊に取りうへ
ゝ
四羅の色を取り一話の末に入るうらは吾儕は一旦
故郷へ帰り豊後のお家へさ一ひげて親の恥辱を清ぐ
うと過世の縁ある猫さんに後再會を遂ませうと言ひく
つ色を打開けば銘の羅紗の女の
汗袖見はとだり打振くお梅はさうり八代もお安も倶に
仰天して互ひに目と目と見合をのく呆れて忙然
たり其ときお安はお梅に裏ひ給へ老もあれ大切なる
羅紗を人に渡しなばお前の功も無ふなる道理を盗人へ

知らねどもいまだ時刻も遅きねば寝ねてあれば夏は切く
まの今うら直にお梅さん八代さんも猪倶に寝ると言ひて
八代一盞に及ばざるやどお前の発作とうり一時なりとも
精神はさまれば先さ一當りて氣御りは汗顔川なる戸間
の小舟那処を一旦尋ねうと言ひつく二個は立上るを
お梅は急にお一とりぬお二個さんのあとをざ一は身に余る
程嬉しひなまど吾儕が側をゆしも放さと大切に守護する
四羅を懸て帰るやどの奴放ひく遠辺に居ませうよし又
此地に居るゆも せよ此行は鎌倉へ遠うねば扇が谷の捕手の

先生の人数多び居らんも量られまじ命を捨てるときは盗まれしは
経を取り得ぬのみならず反て吾侍を三日間不思議の難に
ひらんも知まじとよく吏とても吾侍は覚悟あらく立くなれ
どもお二個さんをもまきぞん世志頼をも立通さで命を
落さず世の人の物笑ひともならうませうと吏のみならず八代
さんハ仮深なれ、扇が谷の深を契とる御身なれば今とても
吾侍と義を結び菩提を倶にさるとても四海を倶の等
とハ吾侍が対して信ありともも扇が後とも不仁なれ大恩
うけると云作と繁慢さを義が立まの先とても命を奪

八三侍が不覚悲歎もなしお両個さんの公ハ初りねども
一旦実家へ赴きて那青柳さんも抜みを捨り再び此家を
東戻き給ひて其行方定めませうと義理を説こる戈
女が言語ハ両個ハ深く感伏して終に其意を聞ひける其
中ハ八代ハ欣然として形容を改りこの既ハ先ゆも亦せ
通り七ツの歳ハ配別まと親の石牌ハ持ちながら番花さんも
備へぶ此年月を過せ所ハ今時ハ知まで世ハ頼ひ
ゆき賢女ハ男子を結びて古郷の親の牌ハ持ちて向る水へ
千歳の経ハも孫増て革業の蔭より双親ハさぞ喜ぶで

ぶうせうと侍る時ゆも親を忘れず其孝心を感じつゝ猶も
余波なほ残れる春の夜のまだ暁の遠き渡り
鶏鳴東籬の関ゆるゆぞお安へ残き外へ出て空の根ざしを
打ながめまぐ赤雲ゆへ間もひまなくおしも路次の小暗き
うち芦間の小舟へ打乗て夜明ぬ先へ藤沢まで皆さん
お付変るさんせと言へ共て頷く八代お梅身猶ひきるその
間へお安へ家内を取汐付け一風呂敷へ包みて幸蒲倶中と
言ひつゝも三個ひとしく脊戸へ取場をさして急ぎける
貞操婦女八賢誌四編巻壹

利田